

幼児の教育 第99巻 第10号 平成22年10月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可 ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2000 / 10



第99巻 第10号 日本幼稚園協会

20世紀は子どもにとってどんな100年だったのか。
今世紀の総決算と21世紀の「子ども」を展望した保育者必読の書!!

子ども 100年のエポック

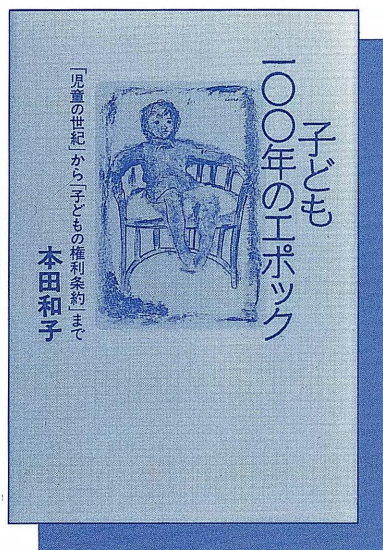
「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで

*本書は
『幼児の教育』の連載を
もとに
まとめたものです。

【内容】

この100年間の「子ども観」「子ども一人関係」の変遷をたどりながら、20世紀の「子ども」を総括した一書です。

世紀の終焉期に頻発する子どもの不可解な事件や理解しがたい言動……これらが物語っていることは何なのか、そしてなぜいま私たちは「子ども」が見えなくなってしまうのか、保育の前提にある「子ども理解」を深めるのに役立ちます。



好評発売中!!

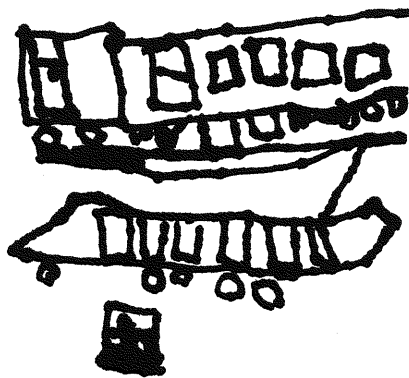
本田和子／著

四六判 280ページ 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第99巻 第10号



幼 児 の 教 育 目 次
——第九十九卷 第十号——

© 2000
日本幼稚園協会

ある日……………	(4)
巻頭言 今保育現場に求められる「真に保育的行為」……………関口はつ江…	(6)
いま、子どもたちは 親と子の情緒体験の共有……………青木紀久代…	(10)
『子ども一〇〇年のエポック 「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで』を読んで……………津守 真…	(18)
保育の日常―見えること見えないこと―……………矢萩 恭子…	(21)
幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤―(四)中村正直との出会い……………国吉 栄…	(28)



比企の畑から・秋……………小宮山洋夫…(38)

私が幼児教育を志した頃(12)……………津守 真…(42)

耳をすまして 目をこらして(7)……………宮里 暁美…(50)

子育ては米作り「子育てに悩んだら米作りを考えよう」……………森 清光…(52)

「ブーブ」に描いたNのこころの世界……………吉川はる奈…(58)

表紙絵／田中 千尋

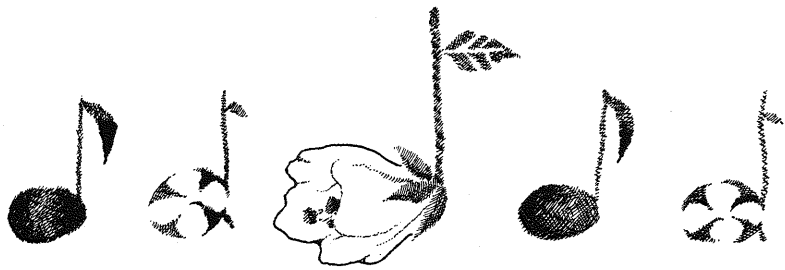
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「早口」

編集委員／田代 和美・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



ある日





撮影・平野 清

今保育現場に求められる

「真に保育的行為」

関口はつ江

幼稚園教育要領改訂実施年となり、保育の実際がどう進んでいるかが気になるところであるが、保育の場は一層混迷を深めているように感じるのは筆者だけであろうか。子どもに任せられる自由な遊びの時間と保育者の誘導や専門の講師による

課題的な活動の時間との区別がはっきりしてきて、自由な遊び活動はできるだけ子どもに任せ、そこで生じる様々な出来事の体験をさせることが大切であるとする考えの保育をみる必要がある。しかし、そこでは子ども達の活動は安定性、主体

性を失っているように窺われるのである。

子どもの自発的な活動が保育の中心であることは言うまでもないが、子どもの遊びはその選択、実行を子ども自身に任せるにしても、子どもの能力や経験、情緒的特性に応じた適切な環境の整理や方向付け、明確な限界の提示や必要な助けがな いまま任されてしまうことは、逆に子どもには大きな負担となるであろう。自分の思いを何で、どう活動に表すか、自分にどこまでできるのかなど、方向も定まらないまま手当たり次第に行動を起こしてみたり、他の人の真似をしてみたりしたとしても、活動がまとまっていかなければ集中し続けて続けられないであろう。満たされない思いや不安定性のために些細なことで衝突したり意地を張ったり、変わったことや無理なことをして何か楽しみを見つげようとしたり、人の気を惹いてみたりする行動などがよう。

また、物が秩序なく散乱していたり、人の動きが錯綜している場面では、その中から自分に意味のある物を見つけたり、活動の道筋をつけて行くのは難しいことである。周りのことに気を取られたり、人との調節に労力をとられるからである。

それも経験であるから大切との見方もあるが、本来の活動を見つけるのに時間がかかり過ぎて疲れて諦めてしまったり、始めたことが妨げられて意欲を失うことを考えれば、まだ発達途上にある幼児の集団においては、先ず第一に考えなければならぬことは、どの子どもも自分の活動に安心し



て取り組めるよう、全体に適度な場の設定、保護、調整が加えられることである。

次のようなある若い保育者と子ども（年中組）とのやりとりの例がある。「YやU達がトイストリーーごっこをしている。『飛び縄がほしい』と言うので、柵においた縄をとって渡す。『お友達にぶつからないようにね』とその場合は言葉をかけたが、その後、武器として使ううちに、隣のクラスのAにぶつけて泣かせてしまう。『これは人につけるものではないからね』と言うと、『じゃあ何のために使うのさ』と応える。縄は渡された時点で『武器』とイメージされており、保育者の思いとかみ合わなかった」「戦いごっこにカレンダーを丸めて剣を作ってやる。颯爽と外に出て遊んでいたが、戦いごっこの中でその剣でHの頭を叩いて泣かせてしまう。『当たると痛いから、この剣では頭を叩かないでね』と言うと、

『じゃあ、何のための物なのさ』と言う」

これはたまたま同じ子どもとのやりとりであるが、子どもは言外に「先生は僕の遊び方がわかっているのだから（わかっているのなら）、僕が使うのにふさわしい物を作る（選ぶ）べきだ、或いは使い方を指示すべきだ」と、保育者としての先見のなさに抗議していると受け取れよう。

もう一つ例を示そう。子どもが色水遊びをして隣同士で色を比べて楽しんでいる。そこへ部屋の中から、「落ちている花びら揉んで入れてもいいと思うけど」と保育者が声をかける。子ども達は殆ど無視しているように見えた。しかし、水遊びが終わってから花びらを拾っていた子がいたので聞こえていたことは確かである。保育者の言葉を受け入れると今の楽しみ方が変わってくるので取り入れなかったと思われるが、保育者の言葉を見視することは子どもに居心地の悪さを感じさせた

であろう。こうしただれた助言や、求めた援助が与えられないことなどが重なると、徐々に子どもは保育者との関係を疎遠にし、勝手な行動が増えるであろう。

この頃、「何々したらいいと思うけど……」「今は何する時かな」というような、決定や判断を子どもに任せる保育者の言葉遣いを聞くが、裏を返せば保育者自らを明示せず子どもと向かい合うこととの回避とも受け取れる。しかし、子どもはどのような言い回しをされようと保育者の言葉は意味のあることとして受け止めようとし、また保育者はそうさせたいのであるから、どうとも受け取れる曖昧な表現よりも、保育者の意図を明確に伝える方が子どもは迷わず応えられるし、拒否したいときには、無視や聞き流しではなく、はっきりと「いや」とか「こうしたい」と意思表示することができることがより大切であろう。もつとも子ども

もは能力や状況等を十分に理解した上での保育者の助言や指示には素直に従うし、助言や助けを求めるものであり、子どもと保育者の関係は保育者のあり方の関数と言える。

「子ども自身に解決させる、経験させる」との発想は、保育者の目を子どもの内面よりも表れる活動をどうするかに向けたようである。しかし、保育者の役割の第一は活動が生まれるための基盤作りであり、なかでも物心両面での安定と秩序を作ることではなからうか。遊具が踏みつけられ、人が突き飛ばされても、何も感じないような状態であってはどんなに面白い遊びが展開しても、人間の形成という幼児教育本来の目的からすれば問題である。教育に世間の目が集まっている今、保育者にも生活者、教育者としての良識が問われていると思うのである。

(鶴見大学短期大学部)

親と子の情緒体験の共有

青木紀久代

「いま、子どもたちは」を共通テーマに、二回にわたってお仕事を引き受けたが、いざ原稿を書く段になって、どんなことでも自由に書いてよろしいという執筆依頼は、そうそうあるものではないと、気がついた。せっかくの機会なので、これまであまり経験のなかった、自分の子育て体験のちょっとしたエピソードも織り込ませていただきながら、特に子どもの情緒体験のあり方とその共有の仕方について、考えてみたい。心理臨床と日常の子育て場面などを行きつ戻りつしながら、近頃私の感じていることを素朴に述べさせていただければ、と思う。

子どもの情緒体験とその共有

子どもたちは、自分の情緒をどのように体験しているのか、また他者とどのようにしてその体験を共有するのか。

この二つの問いは、心理臨床を行うときには非常に

重要なものである。前者は、人の基本的な自己感を規定するものであるし、後者はその人の対象関係の在り方を規定する。そして両者は、互いに関連し合つて発達していくものである。私たちは、他者と情緒の共有体験を積み重ねながら、自らの情緒体験の幅と深さを育てていく。共有の仕方は、必ずしも言語的な様式ではなく、声のトーンや、動きのリズム、強さなど非言語的な様式のやりとりを多く含んでいる。例えば、母親と乳幼児の典型的な、情緒を共有する現象に、情動調律と呼ばれるものがある。生後九カ月前後から見られるもので、乳幼児の情緒表出に、即座に母親が、無意識的にその体験を照り返すように応答する現象であり、これによつて乳幼児は、自己の情緒体験を母親がわかってくれたと感じとることができる。これは、自分の内面と他者の内面的世界があるという理解であり、間主観的な世界を乳幼児が知ることである。逆に共有されることのない情緒体験は、それが本来は自ら

の体験であつたとしても、やがてその人の意識の奥深く、すなわち無意識の世界に追いやられ、なかなか意識的な体験として浮かび上がつてこなくなつてしまふ怖さもある。

私たちは、子どもの情緒的な発達を、その体験を共有することととらえることができるのであり、子どもの内面を深く知ることができるのであり、子どもて深く開かれていなければならない。心理臨床では、このような治療者の姿勢が常に求められている。しかしこのような心的な構えは、日々の子育てをしている母親にも共通しており、むしろ、そういった構えに対して、おのずと開かれているといった方が適切ですらある。

そこでまず、七歳の息子の日常生活における小エピソードを用いて、このような様子を記述してみようと思ふ。

星の王子さまが、自分の星に帰るとき

入眠前に、子どもたちに童話の読み聞かせをするのは、小さな子どもがいる家庭ではよくある光景の一つである。我が家でも、ここ数年このルーチンが続いている。星の王子さまの物語は、一人で読むなら小学校高学年向きだが、挿し絵の美しさやちよつとした味のある会話のやりとりに魅せられて（つまり本当の意味での理解をしているかとなると、はなはだ疑わしい……）、ちよつとずつ読み進めるのを楽しんできた。

ある晩、物語はクライマックスを迎え、星の王子さまが、重たい身体を砂漠に残し、自由な魂となつて、自分の星に帰ることを決意する。黄色い毒蛇に自分の足首を噛ませて、砂漠に倒れるまでの、ほんの数頁に、「ぼく」と「王子さま」の切ないやりとりが展開される。王子さまの様子に、別れを察した「ぼく」は、王子さまの笑い声をもつと聞きたいと哀願する。

しかし王子さまは、別れや悲しさを口にすることなく、さらりと楽しいな会話を笑いながら続けていく。そして、ちよつと真顔になつて別れの夜には、やって来てはいけなかつぶやくのである。

読み手の大人たちは、この小さな王子さまが自分の死を直前にしながら、まず「ぼく」すなわち私たち読者の別れの痛みの方を和らげようと心を配る、その繊細な優しさに胸を打たれ、愛おしさと切なさが交錯する複雑な感情が湧き起こる。自分がその人を失う悲しみよりも、相手のこちらへの思いがしみいつて、そのありがたさと切なさに打たれるのである。私も次第に一文、一文、一語、一語、噛みしめるように、だんだん間をおいてしか読み進められなくなった。とうとう



眼鏡が曇ってしまった。

すると妹が、兄と母親の顔を見比べて、不思議そうに「何で泣いているの？」と尋ねてきた。気がつくくと兄の方は、枕にうつ伏して泣いていたのであった。妹は、物語の文脈はほとんど理解していないが、ただならぬ雰囲気を感じるとにかく自分もその雰囲気を共有するメンバーになろうと、母親である私の胸にしがみついて、顔を埋めてしまった。

息子は、王子さまが死んでしまうのがいやだと言っていて泣き、そして最後には、もういいよ、王子さま、自分が死んじゃうんだよ、「ぼくたちのこと」なんかいいんだよ、といって泣いていた。

その後彼は、一泣きして、「うん、良い話だった。……」とぼつりといってそれっきり眠ってしまった。

今となつては、息子の気持ちの内側を取り出すことはできないが、自分たちが互いに感じていたものは、

おそらく同質のものであり、そしてこれは多分、私たちが初めて共有した少し複雑な情緒であろうと思われる。

もつとも私はその時直接出会っていたのは、涙を流したあとにしては、みょうに満ち足りた様子の息子の横顔と、その静かな息づかい、それから眠りに落ちるまでのほんの数分間握っていた、私の左手（右手は、娘を抱えていた）の感触だけである。しかし、その呼吸のリズムと左手の握り具合は、私自身の呼吸の仕方と身体の弛緩具合にぴたりと適合しており、それが、情緒の共有感を確信させるのである。

一方、身体の右半分は、娘がしがみついてきてそれをなだめている状態で、私と娘は、二人でいる程良い居心地を調整している状態であった。さつさと眠ってしまった兄の手を離し、娘を丸抱えにして、おそらく娘が味わっているであろう、ちよつとした疎外感や嫉妬心を吸収しつつ、母娘二人は、寝息を立て始めた

(……この結末の記述は、筆者未確認)。

情緒的体験の共有における「深さ」

前述のエピソードで共有されたのは、スターンのいう、ある種の生気情動である。これは、喜び、怒り、など特定のカテゴリーに当てはまる、限定された情動ではなく、もつとほとぼはしる、あふれるというような、情動の力動的な側面を含むものである。日々の親と子のやりとりの中で、ままある情緒の共有体験のエピソードの一こまである。

しかしながら、乳幼児期と違い、小学校低学年の子どもと母親を対象に、こうした相互作用場面を調査として観察しようとしても、なかなかお目にかかれな
い。ましてや、観察者自身が子どもとの間でこのような体験を人為的に創り出すのは、ほとんど不可能に近い。

ある意味で情緒体験の「深さ」と呼べるような部分

は、毎日ごく身近な人たちとのやりとりでは、当たり前のようにあり、それが子どもの成長に大きく貢献していると思われるが、私たちは、誰とでもそのような体験を持つわけではない。

私が見が子以外の子どもたちとこの種の経験をしたのは、子どもと一対一で関わる長期の心理療法(遊戯療法)場面においてであった。治療者と子どもとの密な関係の中にだけ開かれた、子どもの心の窓というものは確かにあるように思う。その瞬間は、治療者の身体感覚(中核自己感)を通して、つまり必ずしも言語に翻訳されない体験の形式を残しつつ、つかみ取られていく。この治療者自身の体験を印象深く残すセツシヨンの前後に、必ず治療転機と呼べるものがあることは、経験的事実である。

一般に心理療法過程に関する文献では、治療過程に伴って、あたかも子どもの持つ心的な病理や、無意識の世界などという得体の知れないものが露呈してくる

かのように描かれることが多い。そして、子ども返りと呼ばれる退行状態から、治療者が子どもを育て直す（よく、満たすという言葉が使われる）、あるいは、病的な部分を修正していく、というような意味づけがなされる。しかし、子どもと治療者の関係は、常に互いの間主観的体験を通して発展しており、情緒の共有体験そのものが、子どもの成長を促進していると言える部分がある。

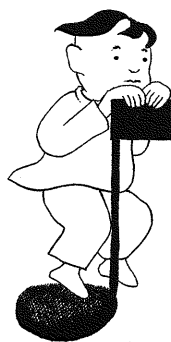
「静かな快」の共有

私たちが子どもと関わる上で、もう一つ大切に共有したいのは、パインが「静かな快」と呼んだ情緒体験である。静かな快とは、子どもが静かに遊んだり、対象との接触や身体的体験を興奮しすぎることなく、沈静した心の状態で得る体験である。このような体験は、強烈な感動や興奮の体験に比べて、地味なものであるし、周りから特別な注意が払われることもなく、

情緒体験の質としては、いわば「地」「背景」といった存在だが、健全な発達過程に大きな影響を及ぼすものと見なされている。

静かな快の体験は、やがてそれを基礎にして、心地よい自己感情や苦痛を克服する能力など、おしなべて人が健康に機能するための土台となっていくのである。

心理療法初期の段階では、なかなか一人で豊かな遊びを続けることはできないが、治療者と多くの共有体験を持つうちに、変化が現れる。子どもが自分で、治療者に関わってほしいこと、自分でやりたいこと、治療者と共有したいことなどを上手に調整しながら、柔



軟に關係をとることができるようになっていく。こうした段階での一人遊びは、そばにいる治療者も疎外感を感じることがない。初期の関わりにくさと違って、治療者自身がゆつたりとして、またその子どもの創造的な遊びを興味を持って眺めていくことができるのである。

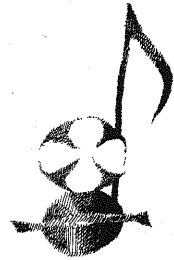
健康な子どもたちの発達においても、この体験は発達上重要である。いつも元気で飛び回っている子どもも、一人静かに絵本を開いたり、窓の外をのんびり眺めていたりするときがある。目標に向かって積極的達成感を求める行為と違い、一人気楽な、自由な時間を過ごしているようにも見える。すぐに声をかけて、こちらの世界に引き入れずに、そっとそのままにして見守ることが、静かな快の共有体験となり、子どもが不安を感じることなく、一人で程良くいられる体験を持つ機会を提供することとなる。あるいは、特に大げさにうなずいたり、励ましたりすることなく、子ども

の何気ない話につきあうようなこともある。さしたる盛り上がりもないが、話し終えたあとに何となくお互いの良い気持ちが残るような体験も、また貴重なものであろう。

乳児期はともかく、家族の中で実はこうした関わりは、父親がうまく担ってくれていることが多いように思う。休日、居間に寝そべって新聞を読む父親と並び、だまって同じ格好で、ポケモン図鑑など開いている子どもたちを見ていると、力仕事以外にもずいぶん子育てに貢献してくれている（はからずも）な、などと気づくことがある。

感じる力……の難しさ

さて、これまで述べてきたように、子どもの情緒体



験は、他者と共有されることによってより豊かに成長して行くが、現実生活では、感じる幅の広さや深さが、子どもの適応感に必ずしもマッチしてこないことが多い。感じる力は、子どもの属する集団関係の中では、その子どもの弱さへと変換されてしまうことがある。

ひとたび弱さに変換された感じる力は、傷ついたりどもにとつて、そのまま抱えておくには、重すぎるものである。家の中でイライラを持って余して当たり散らしたり、しよげ返って引きこもったりする子どもに寄り添いつつ、それらを子ども本来の持つ良い資質としての「感じる力」に再変換して、成長を見守り続けることが、おそらく最も大切なことであろう。しかし、学校や地域の狭いコミュニティの中で展開する人間関係において、親としてそうあり続けることが、どれほど難しいか、日々思い知らされてもいる。

このあたりの話題について、次回、もう少し論じて

みたい。

(お茶の水女子大学)

註

- 1 D・N・スターン著 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 『乳児の対人世界―理論編―』岩崎学術出版社 一九八九年
- 2 サン||テグジュペリ著 内藤あろう(訳) 『星の王子さま』岩波書店 一九六二年
- 3 フレッド・パイン著 斉藤久美子・水田一郎監訳 『臨床過程と発達①―精神的考察―』岩崎学術出版社 一九九三年

『子ども一〇〇年のエポック』

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで』を読んで

津守 真

この本を手にして、私にしては珍しく一気に読んでしまった。それは私自身が身近に知って来たこの一〇〇年間の歴史を、子どもを中心に据えて広い視野から見せてくれているからだろう。「幕を降ろす前に」と著者が序章で書いているように、私共がその大半を生きた二〇世紀を終わる前

に急いでこの時代を振り返りたいという著者の心の促しがあつたのだろう。そして二〇世紀の悲惨にもかかわらず、子どもにかかわる人々が望みをもって次の世紀に足を踏み出すことができるようにとの思いが底に秘められているのではないだろうか。

エレン・ケイの「児童の世紀」というスローガンのもとに幕開けした二〇世紀は「進化論に触発され、新しい科学の力に過剰なまでの期待を寄せた」(P.10)時代であり、そのスピーディな成り行きを私共の時代は見たのだった。子どもの出生については著者は、「子どもが授かった」という昔の人々の敬虔な表現から、「子どもを作るも作らぬも自分の意志次第」(P.11)という生命観へと子ども観の根底が揺るがされてしまった。それが無意識のうちに子どもを「モノ」のように把握させてしまったという著者の考えに私は教えられ、同感した。現代の生活のすみずみにまで浸透するようになったその成り行きを、この著者ならではの多くの資料を駆使して二〇世紀が跡づけられる。

私は「七歳までは神のうち」という日本の諺について、この著者から直接にご教示を得たことが

あるので、そのことに言及したい。この諺は「間引き」「墮胎」にも関連するが、日本人はそれを「お返しした」「山へ行かせた」(P.57)と言った。それは眼前の現実を糊塗する気慰めの言葉という冷たい見方にも著者は気が付きながら、それ

◀子ども一〇〇年のエポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで

本田和子著 フレーベル館 二〇〇〇年四月



よりももっと、「子どもの死に対する『あわくおほろな』心持ちが人々のなかにあつて言葉はその現れに過ぎない」(P.58)という温かさをもつて考えている。この著者の眼はいつも複眼である。

私共がよく知っている第二次世界大戦のときには、ファシズムは「童心」を巧に活用して(P.111)ヒットラー・ユーゲントが組織され、日本では日の丸の鉢巻きをした少国民がつくられた。著者は世界と日本とを対置しながら、戦中から更に、現代の構造主義や心理学にまで言及する。これは私もその中にいた各時点では身辺の戦いに忙しく、予感しつつも全貌が見出せなかった。それをなかば通り過ぎたいま、著者はさまざまな文化資料を提示し跡付けて見せてくれる。そして、二〇世紀後半とくに「子どものために」と創出された学校や子ども関連の営み、諸制度が本当に子どものためであったのかと「いま問い直されよう」と

して」(P.259)その答えは出ないままに二〇世紀の幕は下ろされようとしている。ここに紹介しきれない多くの資料、ことに「子どもを抱え込む市場原理」(P.226)、デパートの出現と子ども向け商戦などの現代分析はこの著者の独壇場である。

最後に著者は、「子どもの権利条約」を、子どもを保護・教育の対象から一人前の「権利主体」と見なすことへの転換である点を強調し、これが「この世紀が後世に託した人類最大の悲願」「遺産」であると考えてこの書物を結んでいる。

「少子化」と「長寿社会」という私共が若いときには考えもしなかった時代の大波に、私共は翻弄されている。著者の言う幼児に対する「あわくおほろな」心持ちを、保育にかかわる私共は次の時代へとどのようにして残して行けるか。この書物を閉じて私は考えた。

保育の日常

―見えることと見えないこと―

矢萩 恭子

園での生活が日一日と積み重ねられ、友だち関係が濃く親密になるにつれ、互いの間を交錯する感情や気持ちの表現は、より複雑になる。子どもたちの遊びや言動から、彼らの間に生起している生々しい感情や、葛藤に極力無神経でいたくないと願いつつ保育に向かう自分がある。

年中から年長へと進んでいく中で、行事などを通じてクラスとして考えたり、相談したり、行動したりする経験が多くなる。また、個人差はあれ、四歳から五歳の成長の流れは言語面での飛躍を現実のものとしていく。子どもたちは、自分の在り方を友だち同士の間でより滑らかに脈絡を

もって、主張できるようになっていく。同時に、そういった自分の在り方がうまく相手に受け入れられないことに対しても、言語的に対応して、強い不満を示すことが目についてくるようになる。或いは、友だちがそれに困難を覚えていると、第三者として、友だちの気持ちの代弁をして意見を述べたり、双方から言い分を聞いたりする人が現われるようになる。

特に、私が担任として難しいと感じるのは以上のような過程を歩んでいる女兒同士の感情の「もつれ」を察知したときである。彼女たちは、既に友だちには打ち明けても、大人には言わない、自分たちだけの交流世界をもっている。それは、必ずしも意識して大人には知られまいとしてそのような訳ではないこともある。たまたま、女兒同士で顔を突き合わせて意見の応酬をしているところに出くわして、敢えて大人の私が尋ねれば、「だっ

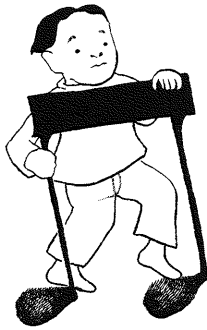
てね」とそのとき起きていることを説明してくれることもあるからだ。しかし、何か通じあわないことが起きると一大事とばかり、「せんせい、せんせい」と呼びに来た以前のような姿はあまり見られなくなる。「もつれ」に関していろいろ訳を聞いてみると、誰かと誰かの互いの葛藤を周りの友だちが心配して「○○ちゃんは、……っておもったから……っていったんだけど、△△ちゃんはまえのときこうだったからきょうは——ってしたくないんだって」などと、単純にその場だけの解決では済まされずに引きずり続けている人間関係の問題に立ち向かおうと複数の女兒が頭を悩ませていたりする。こうなると、保育者としても、やたらに大人の顔をして、彼女たちの間へ登場せず、に互いが十分に悩み、自分を出しあつて、壁をくぐり抜けていかれるよう子どもと同じ立場から意見を言ってみたり、様子を見ながら見守っていこ

うという姿勢になる。但し、密かに濃密に交流を展開しているらしい子どもたちの様子を的確に見守ることはとても難しいし、何が子どもたちの間で起きているのかをつぶさには掴みにくいことも多い。顔つきや表情、何気ないつぶやき、いつもとは違う行動などからそれらを敏感に察知するのは容易でないこともしばしばである。

MとTは、年中の頃から室内で絵を描くという共通の過ごし方を好み、一緒にいることが多かった。特にTは、友だちへ向かう気持ちよりも、自分自身の活動への満足の方が大きいらしく、周囲を気にすることなく、たとえば、保育室に一人残るうとも好きな絵を黙々と描いていたりした。それは、少女マンガ風のみごとな描写力の絵だった。一方Mの方は、幼稚園に言ったら、あれもやりたいこれもやりたいと思っ描いていることが多く、

外へ出たがらないTとは別に、色鬼や高鬼をまた他の友だちと一緒に楽しんでた。そのことを二人の間でどのように受け止めあっていたのかはわからないが、一旦絵を描き始めると二つの頭を擦り付けるように寄せあつて、おしゃべりしながら吹き出しつきの鉛筆描きの絵を延々と描き続ける姿が見られた。

やがて、年長になると、遅時きながらTも園庭での複数の友だちとの遊びに興味を湧いてきたよううで、加わるようになるが、経験が足りないのと慣れていないせいで、既に他の子どもたちの間で



は了解されているルールをよく理解していなかったり、相手の行動を誤解して悪く受け取って憤慨したりとぎくしゃくした感じがしばらく続く。相変わらず仲の良いMも、外での活動のときはTと歯車がうまく噛み合わない様子で、むしろ、Tの方はMがいけないときの方が戸外で嬉々として活動的に遊ぶ。一方、室内での活動では、二人そろうと途端に二人だけになり密やかに絵を描き、手先を駆使して細かく精密なものを製作し、それを使って遊んでいた。そうなると、園庭では親しく遊んでいたAやWも二人の世界には入ろうとしない。このあたりの女兒同士の関係は非常に微妙であった。

二人の活動のなかでも特に面白かったのは、緻密に絵を描いて、切り抜いて貼ったりしたものを使ってお話をつくり、即興で演じてみせてくれる活動だった。この二人に影響されて、ある月の誕

生会ではゲームやマジックの他に四つのグループが自作の（即興）劇を演じるという事態（お陰で一時間半以上かかってしまったが）になった。MとTは、何かピカッと互いの力が合わさると、ぐんぐん活動に加速度がつき、実に生き生きとして過ごしていた。そして反面二人の世界に引きこもりがちにもなった。

一方、晩秋の頃から、今度は大声で罵り合うようなくなることが多くなる。Mは「あやまったのにTちゃんがおこる」と言い、Tは「Mちゃんがあやまつてくれない」と訴える。私が双方の言い分を聞いて間に入ると、二人ともますます自分を主張して平行線となる。少し間を置いて様子を見てみると、Mの方が折れてやるらしく、Mが「Tちゃんと仲直りできた」と報告に来て終わるといことが多かった。この頃のTは小学校進学へ向けての準備のストレスからか気になる行動が増えてい

た。「わたしのほうがさきにつかっていたのに」
「わたしはあやまったのに、くちゃんはあやまってくれない」といった主張を頑として曲げず、相手の気持ちを聞こうとするゆとりをなくしていた。

そんなある日のこと、どこで気持ちが屈折したのか、Tと遊びたいMの気持ちを知らながら、Tはおべんとうのとき、Aのとなりに行き、Mを入れてやらなかった。帰りのときも、TはわざわざAのとなりに入ろうとしたらしく、同じようにAのとなりに座ろうとしたMとぶつかってけんかになる。状況を聞いてみるが、釈然とした話が引き出せず、両者納得しないまま、その場は二人ともAから離して座らせた。翌日、TはまだMのことを怒っている。前日の出来事を感じしていたであろうAに事情を聞いてみると、MはTよりあとにAの隣に来たようで、それがTは許せないらしい。

かった。Tに拒否されたくないMが、直接Tの隣にはなく、Tと並んでいたAの隣に入ろうとしたのかもしれないと私は思ったが、二人とも前日の経緯よりもそのときの不機嫌さに支配されていて、なかなか歩み寄れない。Tは言う。「だってわたしはあやまっているのにMちゃんがあやまってくれないだもん」。Mも言う。「Tちゃんだってわたしはあやまったのにゆるしてくれない」。両者とも自分の行為の悪かった点はしつかり分かっているが、相手の話を聞いて貸して相手を許すことができない。

数日後、登園して、MとT二人して保育室のまごごとコーナーで楽しそうに遊び始めるが、じきにけんかになる。Tの言い分が、何とも筋が通っているようでいて、いかにも不自然であった。Tによれば、まごごとをしたいのはMであって、自分は絵を描きたかったのだと言う。しかし、Mは

一緒にTと遊びたいと言うので、自分は「がまんして」Mにつきあってままごとをした。今自分は、一人で絵を描きたいのにMは描かせてくれない。Mの方はというと、でも、自分はTと二人だけで遊びたいし、一緒にいたいのにと言う。すると、Tは、二人の遊びたい「いけん」が違うのだから、一緒には遊べないと応える。Mも諦めない。Mへは、一緒にいたいのは分かるけれどTちゃん今はいやだつて言っているから仕方ないでしょうと他の友だちとの関わりへととりなし、Tへは、今になってそんなことを言うんだつたら最初からがまんなんかしないで本当のこと言つた方が良かったんじゃないのと反省を促す。

そんなことがあつても、MとTは分かちがたく魅きあつていて、やはり一緒に過ごすことを互いが求めていた。Tが理不尽な理由を強い調子で言葉にしても、Mは、一方的にTに支配され、言い

たいことも言えずにいる訳ではなかつた。MはTの痛いところを指摘するの
で、ぶつかりあ
いも多く生じた。
意見が違

のだからとすつたもんだやりあつたその翌日、今度は二人して絵本の部屋に籠もり、よそのクラスのおもちゃにびつしりとセロテープを貼るといったずらをしていた。どうも扇動していたのはTの方らしかつたが、それには何とも言えぬスリルと興奮があつたようだった。その後も、保育室のあちこちにマジックで色を塗ってしまうような、今さらと思えるいたずらを次々と行なつたり、互いの悪口を紙に書きあつたりしていた。



こうして、二人の関係を振り返ってみるととても独特で意味のありそうな行為が浮き彫りになる。だが、それも後になって、まとまってある期間を振り返ることができるからであって、そのときは、はっきりと表面化してこない二人の気持ちを推し量りかねるとまどいがあった、MとTはかなり親密に付き合っていたので、表面上は担任の私に示してくれないこともたくさんあるようだった。私が気付けないところで交わされた会話、語気や態度がもたらす小さな確執、繰り返される対立と和解は数えきれないほどあったろう。込み入った双方の気持ちは、大人の私よりもむしろ、MやTを取り巻くAやWの方が詳しかった。

結局、私はその場で利他的にしか関われなかつたような気もする。もちろん、MとTそれぞれに対しては、担任としての気になり方で個々のテーマを把握しているつもりだった。個々の抱

えるテーマやそういったテーマを生み出しているであろう背景にも思い至らせ、考えを整理し、私なりのアプローチを繰り返してみる。結局それが精一杯のところまで女児同士のぐちゃぐちゃとした感情の表出につきあい、寄り添うことの不確実な感触は拭い去れない。言ってみれば、それが保育する日常の実際であり、間断ない歩みであるのだろう。

(洗足学園大学附属幼稚園)



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(四) 中村正直との出会い

中村正直との出会い

こうして関信三は、諜者安藤劉太郎としておよそ二年を横浜に過ごし、諜報活動に専念した。そしてこの横浜時代に、のちに東京女子師範学校摂理（校長）として彼の上司となる中村正直に出会って

る。「出会い」とはいっても、それは一方が探る者として、他方が探られる者としての、きわめて変則的で一方的な関係だった。その関わりの中で、ふたりが直接顔を会わせたことがあったかどうかは大変興味のあるところだが、可能性は十分あるにしても、い

ま断言することはできない。けれども、関信三が中村正直を知ったのが諜報活動の過程であったということは、のちに彼が幼稚園創設の事業に関わることになった時、彼の幼稚園理解の枠組みに何らかの影響を及ぼさずにはおかなかつたであろう。幼稚園の始まり譚として、両者の奇妙な出会いについて取りあげることは意味があろう。

中村正直（敬字）は若くして幕府の聖堂の儒者になった漢学者で、蘭学、英学にも通じる当代の大学者であった。慶応二年十月、幕府の英国留学生の取締りとして英国におもむき、一年有余の海外生活を送ったが、幕府崩壊のため四年六月に帰国。静岡に下った徳川家達に従って、静岡の学問所の教授になった。彼はここでスマイルスの『西国立志編』やミルの『自由の理』を翻訳し、出版する。『西国立志編』は大ベストセラーとなり、彼の名は一般にも広く知られるようになる。明治五年六月、政府に招

かれて大蔵省翻訳御用掛となった。明治六年に彼が小石川に起こした同人社は、当時福沢諭吉の慶応義塾と並び称されており、東京女子師範学校が開設される以前にすでに女子の入学を許すなど、先進的な試みをしていた。森有礼、福沢諭吉などと明六社を起こしたり、東京女子師範学校、東京大学などに奉職、盲学校の設立にも関わった。

当時安藤劉太郎と名乗っていた関信三は、この著名人とキリスト教探索の過程で遭遇したのである。彼が探索していたのは、中村正直の静岡時代から上京するあたりの時期である。

出会いの舞台

ふたりの出会いの舞台は、横浜の居留地内に開設されたアメリカン・ミッションホーム（亜米利加婦人教授所）と呼ばれる子どものための教育施設であった。

安藤劉太郎が諜者として横浜に着任してから半年

ほどたった明治四年五月、三人のアメリカ人婦人宣教師、プライン (Mary Prayn)、ピアソン (Louis Pierson)、クロスビー (Julian Crosby) が横浜港に到着した。彼女たちを日本に派遣したのは、外国の女性たちをキリスト教によって教化教育することを目的に設立された「米国婦人一致外国伝道協会」という超教派の組織であった。宣教師バラが一時帰国した際、横浜における混血児の教育の必要性を訴えたため、それに応えて三人が派遣されてきたのである。来日後まもなく彼女たちが開設したのが、横浜共立学園の前身であるアメリカン・ミッシオンホームであった。ここに安藤劉太郎と中村正直がそれぞれ関わりを持つことになる。

彼女たちが来日した当時、安藤劉太郎はバラの英語学校の生徒だった。彼は、次項にあげるような事情から彼女たちの動向を来日直後から監視していたと思われるが、諜者報告書を見ると、安藤劉太郎と婦人宣教師たちのあいだには具体的な交流があった

ことがわかる。安藤劉太郎はアメリカン・ミッシオンホームで行われていた夜の祈祷会に出席していたし、バラとピアソンが敢行した房州への伝道旅行に安藤劉太郎が同行した、という驚くべき記事も諜者報告書に見ることができる。

一方、当時静岡学園所の教授であった中村正直は、明治四年秋、同学問所の教授として招へいしたアメリカ人教師を迎えに、アメリカン・ミッシオンホームをはじめて訪れた。海外生活を体験していた中村正直は、ミッシオンホームに違和感を持たないどころか、かえって大変好印象を抱いたようである。当時ミッシオンホームにはわずかな生徒しかいなかった。混血児の問題は想像したほど深刻ではなかったことと、女子教育自体なじみがなく、西洋婦人が経営する学校ということで恐れられて、日本人の入学者もいなかった。そのような状況を知った中村正直が、みずからミッシオンホームのために生徒募集広告文を書いたという。

婦人宣教師たちがアメリカン・ミッションホームを開き、中村正直が明治四年十月にその生徒募集広告を書いたことについては、幼稚園の歴史の前史時代の出来事としてすでに報告されている。ここでは、のちに「初代園長関信三」となる安藤劉太郎が、幼稚園創設の立役者のひとりとされる中村正直とどのように出会い、また、アメリカン・ミッションホームとどのように関わっていたのかという、これまで取りあげられなかった面にしばって考えたいと思う。

学校設立用地貸与願

さて、アメリカン・ミッションホームと譯者の間には、思わぬところに接点があった。明治四年の『日本外交文書』のなかに、「横浜ニテ米国婦人出願ノ小学校設立用地貸与ニ関スル件」としてまとめられている一連の文書がある。記録は、四年六月二三日、外務省で行われた澤外務卿と米国公使デロン

グとの会談から始まっている。

デロング 我国婦人ブラインと申す者、この度横浜に学校設立のため山手英国兵隊屯所跡地を拝借したく、神奈川県井関長官に米国領事を通して願いを出したところ、領事に對し、公使からその旨外務省に申し出てからでなければ許可できないとの返事がありました。ついで外務省から神奈川県に借地許可の通達をお出し戴きたくお願いに参りました。

澤 地所の件は井関が承知していれば貸し渡しには何の問題もありません。ご趣旨は神奈川県に急ぎ伝え、委細取調べの上ご報告申し上げます。

デロング 地所は商家や遊技場等ではなく、学校設



立のためのものでありますから、地租等についてご配慮下さい。

澤 何を教える学校ですか。

デロング 横浜には小児を教える学校がないので、ブラインは小学校を設立する目的であります。が、実のところは日本国婦人が産んだ西洋人の子どもを教育致すつもりであるとのこと。日本人でも子どもであれば教育するということがあります。

以上が当日の会談内容である。早速同日、外務省から神奈川県あてに事情照会がなされた。「学校建設のことであるのに、なぜ外務省の許可がなければならぬと言ったのか。なにか差し障りでもあるのか、早々取調べの上ご返事ありまし」。二九日に神奈川県から外務省に回答があった。「彼等の教訓とは耶穌の教えであつて、ただ今懸念されているものであり、当県だけで済ませられる問題ではございません。今回ここで許可すれば各開港地でも認めなけ

ればならなくなり、不都合も起こりましょう。それゆえ始めが肝心なので御評議の上可否をお決めいただきたく、ご報告した次第であります」

この件は十一月になつて、外務大輔寺嶋宗則、外務卿副島種臣連名で「米利堅合衆国特派全権公使チャーレス、イ、デロング閣下」あての「米国婦人出願ノ小学校設立用地等貸与ニ関シテハ支障ナキ旨回答ノ件」と題する文書で幕となる。ブラインの学校設立のための借地願いは、結局、「貴国政府御所用の儀と相察候」という変則的な形で許可されたのであつた。

この間にやり取りされた文書によれば、政府は混血児の問題を決して軽く見ていたわけではないが、頭を痛めていたのは、教育の問題とというより、日本政府にどこまで責任があるのかということ、キリスト教をどうするかであつたように思われる。とりわけキリスト教の問題には苦慮していた。そのため、借地には何の問題もないと言いながら、許可ま

でに五か月を要したのである。外務省と神奈川県で取り交わされた文書に貼付された「貼紙」には、「婦人の小児に教ゆるは格別行届趣也、神奈川にても注意して其学規を窺置へし」とある。彼らが何を教えているかよく注意せよと、キリスト教に警戒していたことがわかる。

この時貸借許可が下りたのは山手一七八番であったが、「貴国政府御所用の儀と相察候」という文言もあって、すんなりとプラインたちが取得することはできなかった。彼女たちは代わりに山手二二二番を入手し、明治五年十月に移転した。問題の一七八番には、明治八年六月、キダールのフェリス・セミナーが校舎を構えることになる。

いずれにしても、この件が外交問題の一端に上つていたことは間違いなく、当然諜者の監視するところとなった。婦人宣教師たちは借地許可がなかなか下りないために、申請から二か月後に、横浜山手四八番館でミッシヨンホームを暫定的に開設した。山

手四八番館はバラの私邸であった。彼女たちの来日はバラの呼びかけに応じてのものであったため、バラは彼女たちに自宅を提供せざるを得なかったのであらう。五年十月に二二二番に移転するまで、彼女たちはバラの館で、アメリカン・ミッシヨンホームを運営した。そして、やがて同所で開かれるようになる夜の折袴会に、安藤劉太郎は公然と通い始めることになった。

明治四年末に安藤劉太郎の配下に入ったある諜者は、横浜着任後すぐに、「小生はピヤールに入門仕居候」と書いている。ピヤールとはピアソンのことである。アメリカン・ミッシヨンホームは生徒数が少なかったため、英学を希望する男子に、ピアソンが担当して午前中英語と聖書を教えていた。それまでは安藤劉太郎がバラの門下生としてミッシヨンホームに出入りしていたが、より詳しく調査する必要があったのだろう。そこであらたに長崎から破邪僧が呼び寄せられ、諜者として送り込まれた。「ピ

ヤルソン（ピアノン）学校聖教生盛ナリ、ピヤルソン学校ノ夜会日曜日一周ニ二夜ツ、ナリ、二月三十日ノ夜会杯アマリノ群眾ニテ書生ノ帽子洋傘等種々品物紛失スルホトノ盛況ナリ」。これでは課者を送り込まないわけにもいかないであろう。ミッシヨンホームは、日本人学生の熱気あふれる場所となつていったのである。

クラークの雇用契約条項

中村正直がミッシヨンホームを訪れて生徒募集広告を書いていた時、同所を舞台に、キリスト教にまつわるもうひとつの外交問題が同時進行していた。そもそも中村正直がアメリカン・ミッシヨンホームを訪れたのは、同所に滞在していたクラーク（Edward Warren Clark）を静岡に迎えるためであった。クラークは静岡学問所で物理と化学を教えることになつていた。ところが彼の静岡御雇いに関して問題が生じたのである。雇用契約書にキリスト教の

宣教を禁ずる一条があつたからである。

飯田宏「E・W・クラーク著『日本に於ける生活と体験』」（『静岡女子短期大学紀要』二号）によれば、クラークは熟慮の末、その一条を撤回しなければ契約を承認できない旨を政府に申し送つた。中村正直はその調整のため、同所に滞在を余儀なくされたのである。彼がアメリカン・ミッシヨンホームの生徒募集案内を書いたのも、「当所ニテハ、ピヤルソン門人ノ由ナリ」と課者に報告されるほどピアノンと親しくなるのも、その時のことである。

結局、勝海舟と岩倉具視の尽力によつて契約書からその一条が除かれることになり、クラークの静岡着任が決まつたが、中村正直滞在中に、アメリカン・ミッシヨンホームを舞台に、キリスト教宣教を黙認するか否かの綱引きが行われていたわけである。クラークはこの戦いに勝利し、中村正直と共に静岡におもむく。そして着任後ただちに、元將軍家のお膝元静岡において、宣教を始めるのである。政

権首脳部の黙許あつてのことであつた。

年が明けて五年二月、中村正直は妻や娘を入学させるために再びミツシヨンホームを訪れた。安藤劉太郎は、人知れず日本のキリスト教政策が二度までも押し切られたこの場所を、特別な思いで注目せずにはおられなかつたであろう。そして外国人に牛耳られたこの場所で、かの異教徒たちに協力し、宣伝文を書くどころか、率先して家族までも入学させたこの輩を、彼がいかに苦々しく思ったことか、想像にあまりある。

「擬泰西人上書」

さらに安藤劉太郎は、受洗の直後に、中村正直に関する驚天動地の情報を手に入れていた。明治四年末に、「擬泰西人上書」と題する一文が匿名で発表された。匿名の西洋人が天皇に上奏する形で書かれたもので、「日本は西洋文明を盛んに輸入しているが、その根本たるキリスト教を採用していない。こ

れは枝葉に走つて根本を忘れたものである。よろしくその根本を採用し、まず天皇自身が受洗して模範を示すべきである」というセンセーショナルな内容であつた。

キリスト教禁制下での信じられないような思い切つた文章である。小澤三郎『日本プロテスタント史研究』によれば、宣教師ブラウンがこれを翻訳して本国に送るなどし、政府のキリスト教政策にも影響を与えたといわれている。明治五年八月、『新聞雑誌』第五六号付録に転載されて、多くの人々の目にふれるところとなつた。反論文が掲載され、さらにまたその反論が出るなど論議の的となつて、人々の間では一体誰が書いたのかと、その後長いあいだ



詮索され続けたという。

ところが譯者報告書を見ると、すでに早い時期に、「擬泰西人上書」の著者は中村正直であると明らかにならざりしことがわかる。「右学校ハ教授師中村敬三管轄致シ居候処、同人ハ三日奉呈置候外臣某之建白ヲ認候ニ而、余程彼教之為メ尽力致シ候由ニ御座候」(五年二月二三日付)。静岡の洋学校でキリスト教が蔓延しているものになつている中村敬三(正直)は、先日三日にお届けした「外臣某之建白」すなわち「擬泰西人上書」を書いた者で、よほどキリスト教のために尽力している様子である……。この報告書を書いたのが、ほかならぬ安藤劉太郎であつた。「擬泰西人上書」を上司に差し出した二月三日というのは、安藤劉太郎が洗礼を受けた翌日である。受洗直後に文書を宣教師からもらひ受け、早速上司に届けたのであろう。それから何日もしないうちに、彼はその著者が中村正直であることも打ち明けられたのである。洗礼を受けて教会の内

部に潜入しただけの成果はあつたということだろう。けれども、苦勞のすえに入手した一級の情報も、なんら政府を動かすことはできなかった。当局は、この事実をきわめて早い時期に知りながら、その情報を握りつぶすほかなかつたのである。

中村正直が「擬泰西人上書」を書いたのは、クラークを静岡に迎えてまもなくのことであつた。安藤劉太郎の報告書に次のようにある。「静岡県内洋学校義者昨年来亜国教師クラーク在留ニテ公然学校内ニ於テ生徒ニバイブルヲ伝習致シ候処、近来ハ幾多之信教徒モ出来致シ、洋教日ニ蔓延之条伝承仕候」。キリスト教宣教を黙許されたクラークが公然と学校内で生徒に聖書を教え、静岡県内にキリスト教が蔓延してしまつたのも、中村正直が目を見やうな「擬泰西人上書」を書いたのも、あのミッシヨンホームでの力の対決に日本が負けてしまつたためである、と安藤劉太郎は事態の推移を見ていただけに臍を噛む思いだつたのではないだらうか。外国と

の交際上やむなしとはいえ、断固とした決定がなければ取り返しがつかないことになる。中村正直と、静岡でのキリスト教の隆盛と、ミッションホームのにぎわいは、彼にとつてその怖るべき雛形にほかならなかった。

幼稚園の歴史を考える上で、関信三がこのような事情のもとに中村正直を知っていたことは覚えておいてよいだろう。関信三はキリスト教探索の過程で中村正直に出会った。数年を経て、若き日の夢むなしく破れ、僧侶としての生き方を捨て、挫折の末に再起した彼は、過去を秘して東京女子師範学校に奉職する。そして、そこで、かつて敵の巨魁と目していた中村正直に再会する。彼が受けた衝撃を思うと、痛ましさに言葉を失う。しかし、その時の驚愕は、やがて幼稚園という未踏の世界に、彼の残りの生涯をかけようという決意へと変わっていく。

ほかの誰でもない、関信三がフレーベルの幼稚園

の紹介者であったということが、日本の幼稚園にとつて特別な意味を持っている。諜者として生きて過去のすべてが、彼の幼稚園紹介の原点にあると私は思う。

また付け加えれば、彼が当時日本では一般的でなかった婦女子の教育について多少とも見知ったことが、同じく諜報活動の過程においてであったことも注目する必要があると思う。彼は婦女子の教育というものを、国と国との力の対決の場において、国力の差を背景に体験せざるを得なかった。そのこともまた、のちに彼の幼稚園論を考える時に意味を持つてくるであろう。彼の幼稚園紹介については、本連載の後半で取り上げるつもりである。

今回は、安藤劉太郎がついに洗礼を受け、「関信三」となつて洋行するまでを書いてみたい。

比企の畑から・秋

小宮山 洋夫

秋、まだ、ナス、トマト、トウガンなど、夏野菜の姿が見える。地這えキュウリの収穫も続いている。

クズの花の咲くころ種をまいたキャベツ、ブロッコリーは定植されて、葉数をふやしている。

キャベツ畑には、モンシロチョウが、必ず訪れる。それはほっとするのどかな風景である。しか

し、栽培者の脳裏には、すぐさまキャベツ類の葉を食べるモンシロチョウの幼虫、アオムシの姿が映る。すると、せつかくの風景も、アンピバレンツなものに転化してしまう。

涼しい気候を好むハクサイは、秋、成長して、冬に向かって、球を結ぶ。カブラハバチの幼虫ナ

ノクロムシをはじめ、ハクサイを食卓とする虫は多い。そして、文字通り、ビッシリとつく。

M氏はいう。

「ハクサイは、無農薬では、絶対無理」

そうかなあ、農薬を使つては、何のための家庭菜園かわからない。まあ、ともかく、せつせと、手で虫取りを試みよう。

その結果、半分は結球して、見事な大物ハクサイになった。ダメージの大きかった残りの半分は、半結球にとどまった。これは、ハクサイの一種、半結球のサントウサイと見なし、丸ごと味わった。

秋の菜園のビックイイベントは、何といつても、「サツマイモ掘り」。この大人にとつてもエキサイティングな祝祭には、友人、知人も、何組が参加するようになった。

昨秋、収量はまあまあだったが、表皮が虫（コ

ガネムシの幼虫など）に食われたイモが多かった。水でイモの土を洗い落とすと、あばた面が目立った。味が変わるわけではなく、食害は表面にとどまっているので、騒ぎ立てる被害というほどではない。「はじめてうまいイモを食べた」という感想もとどいた。

だれでも、イモを掘ると、何となく懐かしい思いがこみ上げてこないだろうか。

サツマイモの

栽培適地は、サ

トイモの栽培

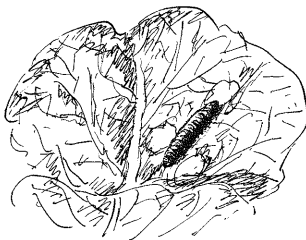
地、ジャガイモ

の生産地は、ヤ

マノイモの栽培

地と重なるの

だ。稲作以前、



キャベツを食べるアオムシ

サトイモ、ヤマノイモは、日本人の食生活の主役だった。その栽培の起源はあまりに遠く、かすんで分らない。野性のヤマノイモ（自然生）は、いまも、山麓のあちこちに、自生している。日本人は何百年、何千年と、イモを掘りつづけてきた。それで、イモ掘りには懐かしさが伴うのだろうか。

ニンジン、ダイコンの収穫利用が忙しくなる。秋は、これらの根物野菜、サツマイモ、サトイモなどのイモ類、それにカボチャ、葉物野菜をたくさん食べる季節だ。そして、きびしい冬にそなえる。

ミズナの種をまく。この葉の切れ込みが深く、株の分けつのはげしい菜っ葉は、低温に強く、霜に当たっても、葉の一部を枯らすだけ。冬を通じて食べられる。



ハクサイを食べるナノクロムシ

固いアゼ道のあちこちに、モグラが、トンネルの出入口をつくっている。なぜか、やわらかな畑のウネには、あまり見られない。いずれにせよ、彼等みんな、本能に従って、トンネルを掘っている。トンネルづくりの方法に、それほどの違いはないだろう。

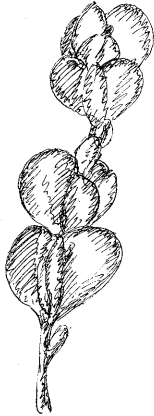
野菜は、太陽、雨、土に恵まれて、育つ。原理は、単純といえば、単純だ。それで、同じ土地で、何年か栽培すれば、その方法は、だれが取り

組んでも、同一のものに、落ちついてもよいはずだ。ところが、実際は、そうはならない。

例えば、雑草、その除去の程度は、栽培者によつて異なる。M氏はかなりていねいにむしる。しゃがんで話をしている間も、視界に入る草をむしっている。多分、無意識に。H氏は徹底的に除草する。彼の畑には、すでに、草があまり生えない。

一方、X氏（この人とは、ほとんど出会ったことがない）のように、雑草の大海の中で、野菜をちらほら、育てている人もいる。

ほとくの畑は、X氏に次いで、草が多い。雑草



ヤマノイモの花(果)穂

は、野菜の根元をおおったり、堆肥づくりの素材として、大切なパートナーとして処遇されている。

方法の違いは、草取りにとどまらない。ウネのつくり方、肥料の種類、与え方など、多方面にわたる。

モグラとちがつて人間は、幸いといおうか、不幸といおうか、本能にそつて、自然とつきあう程度が小さい。自然を解釈し、頭の中で再構成して、それを自然とみなしてつきあう。

野菜畑は、人それぞれの世界観を表現しているようだ。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者



私が幼児教育を志した頃(12)

津守 真

米国留学中、私はミネアポリスの家庭に一月ずつ泊めて頂くことになった。次の家庭に移るときには、いつも互いに別れ難い思いが残った。クラウンス家を去るときには、ミセス・ストロウブリッジは風邪を引いていて、明日から私がいなくなると言って悲しかった。一九五二年一月十三日午後、私はクラウンス夫人に連れられて、次の一月をすごすことになったW家に行った。クラウンス夫人は朝からそわそわしていたが、出がけに私を抱擁して、「おばさん」という呼び名を決して他の人に使ってはいけないと私に言った。

ミネアポリスの旧家―W家

W家は、大きなデパートや銀行の立ち並んだ市の中心部の小高い丘の上にあった。四十



年ほど前までは裕福な家の並ぶ閑静な住宅地だったが、いまは繁華街の大通りから一筋奥にはいったところで、その近隣十数軒だけがわずかに喧騒を逃れていた。W家は三階建ての煉瓦造りの大きな家で、ベッドルームだけで十以上あり、私は二階の一室を与えられた。息子と三人の娘は東部の大学に行っていて、末娘の五歳のグレイシーだけが両親と共に住んでいた。隣室には、ミセス・コクリンという長年ナースリースクールの先生をしていて退職した老夫人がいた。それからミセス・フリーマンという、W夫妻の結婚以来この家に住んでいるメードさんがいた。スエーデンの人で、いまは金曜から日曜までの三日間は自分のアパートに帰る。その他に週二日間洗濯掃除に来るお手伝いさんがいた。こういうわけで、私は皿洗いも掃除もする必要がなく、ちょうど大学も忙しくなったところで、勉強に専念できた。また、ビルグリムファウンデーションという、大学キャンパス内のクリスチャン学生のクラブでいつも昼食を食べていたが、そこでの若い学生たちとの付き合いも結構忙しくなっていた。

W家の毎日は極めて静かだった。W氏は殆ど書齋で過ごしていた。W氏は静かで、影のように家の中を歩く。応接間、書齋、それから三階の部屋には、祖父母時代よりの書物がところ狭きまでに天井までぎっしりとつまり、東西洋の古い陶磁器、人形、絵画等が家中至るところに置いてあった。W氏の母親が東洋の書画骨董の蒐集家だったとのことである。W氏はアメリカでも有名な工科大学の出身なのに、彼の読書は、シェークスピア、チョーサーから、ラテン語の史書、比較言語学、仏典の翻訳など幅広い。私がこの家に来



て間もなく、私はW氏の書齋に呼ばれ、徳川家康の肖像画の軸を見せられて、日本語で書かれた賛を読むように言われて驚いた。

W氏は月に数回、ミネソタ州北部にある水力発電の会社に行く。W氏の祖父は一八五〇年頃、アメリカ東海岸よりこの地方の地質調査団の一員として移住してきた。この大きな家を建てたのが一八七〇年頃という。

こういう格式のある家なのに、日常生活は質素で、ほとんど人も来ない。W氏はユニテリアン派の教会に属しているが、教会には殆ど行かない。夫人もまた静かな人である。夫人は週に一度、ミネソタ大学の「小説の書き方」という講義に通い、自室でタイプライターに向かう時間も多かった。末娘のグレイシーを週一度ミュージアムで開いているパレー教室に、日曜は教会の日曜学校に連れて行く。夫人は週に一度は音楽会やお芝居にゆき、しばしば私を連れて行ってくれた。

アメリカ人の家では、朝起きると、奥さんがガウンのまま朝食を準備し、台所で食事をするのが普通であるが、W家では朝食にもきちんとスーツを着て食堂で食卓につく。夕食時にはミセス・フリーマンが鐘を鳴らすと、W氏夫妻とグレイシーと私と、皆上着を着て食堂に行く。椅子につくとミセス・フリーマンがいつもきまった物腰で給仕をする。おそらく彼女がW家に仕えて以来四十年間同じようにこうしてきたのだろう。食事が済むと応接間で皆で雑談をする。週に三日ミセス・フリーマンのいないときにはW氏夫人が食事を作り、皿を洗い、W氏が皿を拭く。格式のある旧家の主人でもこの点では平民的である。



近所の人が通りがかりに立ち寄って話しこむということはない。客を招待するときには、主人夫妻は威儀を正して玄関で迎える。食卓の給仕はミセス・フリーマンではなく、正式の給仕人が雇われる。

こういう旧家はもはやミネアポリス市に多くはない。私を泊めて下さった家庭の中で、旧家はここだけだった。旧家といわれた家も若い人の代になると古いものを捨て去って出て行く。あるとき、W氏自身が話してくれたのだが、父親が死んだとき、兄弟はだれもこの古い家を欲しがらなかった。古風な煉瓦作りの薄暗い大きな建物、役に立たない無数の書籍、古い品々、それよりも便利で使いやすい近代的な家具と機械の方が若い人々には魅力的だったのだそうである。W氏はたまたま静かな古い生活を愛していたのでこの家を受け継いだ。子どもたちはだれもこんなものを欲しがらないだろうと笑っていた。

ミネアポリスでは富裕人たちは、子どもたちを東部の大学、高等学校に出す。W家でも子どもたちがクリスマスと夏休みには東部から帰ってくる。そうすると普通のアメリカの若い人たちと少しも変わらない。床に寝転がって本を読み、母親から注意される。

五歳の娘

夕食後は、居間のソファで、五歳の娘のグレーシーと、私が日本から持ってきたキンダーブックを読むのが日課だった。それは私共にとつて楽しい時間だった。

グレーシーは母親を愛し、母親も彼女を愛していた。ある晩、母親が、グレーシーが遊



んでいる間にこっそりと音楽会に行った。しばらくしてグレイシーは母親がいなのに気がつき、泣いて家中を捜し回った。私はそれからどうなるかを興味をもって、グレイシーのそばに行きたいのを我慢して見ていた。父親は書斎から出て来なかった。マミー、マミーと家中を歩き回るグレイシーの声が聞こえていた。と思ったら、驚いたことに、グレイシーは新しい折り紙とはさみを手にもって私の部屋に来て、私のそばに座っていた。母親が帰るまで彼女は私の傍らで遊んでいた。

W家の脇は斜面になっていて、橇で雪滑りをするのに最適だった、土曜日にはグレイシーも幼稚園がなく、私も大学の授業のないときは、雪滑りのスリルを楽しんだ。時には近所の子も加わり、私も子ども時代に戻ったような気になった。土曜の午後のW家は、あの音ひとつしない静けさで、私はしばしばもの寂しに襲われた。ある土曜の午後、私は久し振りに倉橋惣三『幼稚園雑草』を開いて、とても日本が懐しくなった。子どもに対するあの柔らかい空気はここでは得られないものだ。ここの児童心理学は専門的になりすぎて心がかさかさになる。学問的にはいい仕事でも、うるおいがいい。全く忙しい。「我は己自身を子どもに与えん。教育は己自身を与えることである」というフレーベルの言葉は、ここでは理解されないように思った。それは異国の生活の緊張感からくる私自身の異常心理だったかもしれないが、その後の学問の進展をみると、子どもの学問は、ひとりひとりの人間の心の真実に立ち戻って考えることを忘れてはならないとその時に考えたのは間違っていないかったと、いまになって思う。

人間はどこでも同じ

この年は特別に雪がひどかった。吹雪の夜だった、ビルグリムファウンテンでの会合が遅くなり、W家の前まで急ぎ足で帰って来ると、よろよろと前を歩いていく人がいた。近づいたら、女の人だった。追いつそうとすると、急に私の足元に倒れてきた。昨日からのすごい吹雪で、歩道には人の歩いた道が一尺ぐらいの幅で付いているが、両側は膝より上まで雪が積もっている。今ここで倒れたら凍死してしまうだろう。私は抱き起こすと、三十歳ぐらいの瘦せた女性で、まるで幽霊のように見えた。やっと抱き起こしてどこまで行くのか聞きながら、歩いた。酒のにおいがぶんと臭った。酔っ払いとこんなに夜遅くまでかかわりあうのは嫌だから、よほど家に入ろうかと思つたが、こんな雪の中に倒れていたら本当に死んでしまう。とたんに考えた。私もここでアメリカ人の世話になつているのだから、いずれにせよ、この人をうちまで送つていかなくはない。たとえ酔っ払いであろうとも、同じ人間だ。ほっといはいけないと思つた。決心して、倒れそうになるのをかかえながら歩いた。何を聞いてもただでさえ分からない英語が、酔っ払いの英語だから一層わからない。分かつたことは、その人の家まで遠くないということ、送つて来てくれるということだった。途中で、その人が持つている紙袋の底が抜けて何か雪のなかに落ちた。一生懸命暗闇を探して見つけたら、何と胸に抱えるぐらいの大きなウイスキーの瓶と、もうひとつウイスキーの小瓶だった。私は片方の腕にそれをかかえ、もう一方の腕で倒れそうな女の人をかかえて、吹雪の中でそれは大変だった。途中で彼女





は何度も雪のなかにひっくり返ってしまふ。母にはお酒のことを隠しているんだからうちに帰っても言うなと言つた。うちであなたが母に会つたら、きつとびっくりするだろう。

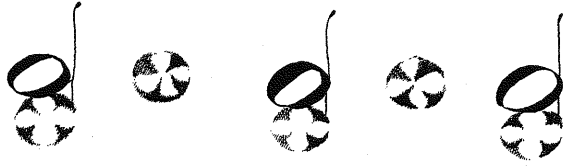
それはこわいんだからと言ふ。何度も母に言つてくれるなと嘆願するので、そんなこと言わないから安心しなさい、しかし、何でこんなに酔つぱらうほど酒を飲むんだとお説教しながら十プロックほど歩いた。暗闇の雪の中で心細かつたが、次第にこの人がかわいそうになつた。良く考えれば、この人も私も神様の目から見れば大差はない人間である。見下してはならない。ようやくその人の家にたどり着いてドアのなかに送り込んだ。一緒に入つてくれと言つたが、もう私の役目は済んだと思つて後も見ずにW家に帰つてきた。

当時は東京の町には酔つ払いは多かつた。清潔なので有名な米国のミッドウエストの町、ミネアポリスで女性の酔つ払いに会うとは思つてもいなかった。占領下の日本では米国人というと軍人か特別な人しか知らなかつた私は、どこの国にもいろいろの人がおり、だれでも同じ人間だということを、あらためて知らされた。

文章を書く人

W家の生活は、家が広いこともあり、互いに顔を会わせることも少なく、干渉がなさすぎるくらいだつた。ことに後半二週間は、W氏夫妻は東部に行つて留守で、私は全く気楽に過ごした。そして二月二十四日、夫妻の留守の間に次の家庭ホワイト家に引越した。

W氏夫妻は、それから五年後の一九五七年秋に客船「プレジデント・クリーヴランド」



号で日本に來られ一月程日本各地を旅行された。私は大学の仕事に忙しいときで、思うほどに案内できなかつたことをいまになつて残念に思つてゐる。W氏は、帰国してすぐに『一旅行者の見た日本』と題して四十ページの小冊子を自費出版された。鎌倉、日光からはじまり、関西、九州、阿蘇、島原と、旅で見聞きされたことを、宿屋や料理にいたるまで具体的、詳細に記されている。その最後に、「一般論には眞実はない」というヴォールテールの言葉を引用しながら、日本の自然、文化、人についての一般的感觉を記し、「日本人は自発性があり、勤勉で、十年から三十年の間に一大工業国になるだろう。私は日本が物質的、芸術的、精神的に世界に大きな寄与をすることを、そして西欧はそれを認めるにやぶさかでないだろうと信じてゐる。」と結んでゐる。W氏の旅行記を読んで、私は、W氏の静かな書齋を思い起こした。

米国人は、しゃべるのが好きな人が多い。ある人はしゃべるように気楽に手紙を書いてくれる。W氏のように、文章で表現する人は少ない。私が滞在していたとき、あの家の中の静けさに多くの思いが籠められていたことを私はW氏の旅行記を再読して思つた。W氏はその後数年で亡くなつた。夫人は東部に移住されていまでも健在である。グレーシーは菜食主義者で、母親と一緒に住み、飛行機のパイロットである。

ミネアポリス市の中心部にあつたW氏の大いなる家も、氷滑りをした丘の斜面も、いまは再開発されて繁華街になり、その位置を確かめることも困難である。

目をこらして (7)



「きのう、森の公園でね、ももちゃんがあそんでいたらね、ふわふわって綿みたいのがいっぱいとんでたんだよ」朝、おはようの挨拶もそこそこに、ももちゃんが息せき切って話し出した。

幼稚園の隣にある公園には、大きな木が沢山あり、森の公園と呼ばれている。子どもたちは、幼稚園が終わった後、そこでよく遊んでいる。

私も、ちょうど昨日、帰り道に公園の中を通り、ふわふわ飛んでいる綿のようなものを見ていたので、「そうだよね、とんでたよね、先生も見つたよ」と話していた。

すると、二人の話を聞いていた、たくみくんが話に加わってきた。

「ぼくもね、見たんだよ。サッカーやっててね。あ、シャボン玉だ、シャボン玉だ、って言ってたんだよ。それでね、まさきくんが、ジャンプして食べようとして、コーチに叱られたんだよ」

自分が見たこと、感じたこと、やったこと、驚いたことそれを言わずにはいられない気持ちがある。





耳をすまして

一年生になって初めてのプールの日。体の小さいかずほは、たくさんの不安を抱えている。その日、私は仕事で、夜遅くなると伝えると、「えー、お母さんにプールのこと話したかったのに……」と不満そう。それなら、手紙を書いて置いといてよ、と頼んで仕事に出かけた。

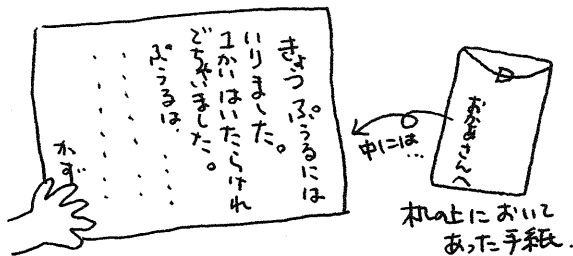
その夜。家に帰るとテーブルの上に通の手紙。ああそうだった、そんな約束をしたな、と思いながら封を開く。『きょうはげりをしちゃいました。きょうぶうるにはいりました。いちどはいつただけででちゃったよ。ぶうるはさむかったよ。ぶうるはふかかったよ。』

翌朝、娘と話した。深かった寒かったプールのことを。大丈夫？ という気持ちを抱きながら娘の話聞いていて、その語調が決して暗くないことに気付いた。

自分が経験したことを話す。うれしいことや困ったこと、それを言わずにいられない気持ちがある。

自分の気持ちを言葉にする、そのことに大切な意味がある。だから、今日もゆつくり耳を傾ける。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）



子育ては米作り

「子育てに悩んだら米作りを考えよう」

森 清光

「子育て」と「米作り」っておなじ？

私の手元に「稲作こよみ」と呼ばれる米作りの作業を書いたものがある。その地方の気象、品種に合った標準的な稲の作り方を書いたものである。JAや農業改良普及所が日本中で作成し、殆どの農家がこの「稲

作こよみ」に沿った作り方をしている。読者の皆様は、子育てに何の関係があるのかきつと不思議に思われていたと思います。

私は会社に勤めるかたわら、父の作ってきた土地を受け継ぎ、約二十年米作りをしている。最初は「いや・仕方なし」に作っていたのだが、手をかければ

それに応えてくれる稲に気づいた。ちょうどその頃子育てのまっ最中でもあった。

「稲作こよみ」をながめていると、あれっ、子育てと同じじゃないかと感じた。子育てに悩んだ時、「稲作こよみ」を眺めていると、どうしたらいいの不思議と見えてくるのである。むずかしい子育ての本より、すつきりとした子育てのバイブルとなり得るのである。

「稲作こよみ」に沿った子育て

「稲作こよみ」には、まず、稲の生育に合わせその時期の「目標」が書かれている。

- ① 「良い苗を作る」
- ② 「分けつを確保する」
- ③ 「無効分けつの抑制」
- ④ 「籾数を確保する」
- ⑤ 「稔りをよくする」

という風にその時々目標が記されている。五つの目

標を経て成熟期を迎えるわけである。

子育てに当てはめてみよう。

① 播種した籾を保温し、大事に育てる時期です。

生まれたばかりの赤ちゃんに、どうか元気に育つてくれるようにと、どの親も願い、ミルクを与え、おむつを取り替え、だっこしてスキンシップをはかり大事に、大事に育てる時期です。

② 「元肥」といって稲作り中最多の肥料を施し田植えをします。田植え後は保温のために田圃の水を深くし、根付きを促進し、根が大地に付くと分けつを始めます。このころの稲管理のこつは活着したら浅水にし、時々水を切り、根に刺激を与えると共に、根が酸素不足にならない様にこまめに水操作をすることです。収量確保のため思いっきり分けつを助けてやります。

子どもは色々な事に興味を持ち始め、親の「元肥」を肥



やしに多くのことを吸収し始めます。小学校中学年位までの時期でしょうか。温かい水ばかりでなく時々水を切り刺激を与えつつ色々な情報（酸素）もいれてあげ、友達からの情報も大切に、こまめにかまってあげることが大切でしょう。

「元肥」がうまく効いていれば、どんどん「分けつ」することでしょう。

③放っておくと、どんどん分けつし幹数は増えますがあまり増えすぎると籾が実った時に不実籾（本当に実らない細い籾）が多く出ます。水は「中干し」といい完全に圃場を干し上げ、肥料は与えません。この時期に肥料を与えると無効分けつが進むばかりでなく「幼穂形成期」といつて籾の赤ちゃんが籾の中心でできるのですが、数が多すぎると不実籾が多くできてしまうことと、節間（籾の背丈）が延びすぎ、ひ弱な倒れやすい籾となってしまいます。肥料が切れて籾の葉は黄色くなってきましたが籾自身の持っている生命力を信じ、心を鬼にして我慢、我慢が大切

です。

子どもはと見ると、色々な事を吸収しつつ、あまりの情報の多さにアップアップ、特に最近の社会は子ども自身が咀嚼出来ない情報が溢れています。今まで通り親が肥料を与え続けると……。子どもの力を信じて少し子離れの練習をしましょう。我慢する事も教えましょう。将来成長したときに体のどこかにその力を秘めているはずですよ。

④ぐつと抑えつけた籾に間断的に水を与え第一回目の穂肥を穂が出始める二十日位前に、第二回目の穂肥を穂が出始める七日位前に与えます。この時期になると籾内で籾の数も決まり、幹の背丈の成長も止まります。いよいよ穂が出る準備に入ります。人でのう思春期の入り口に立った状態でしょうか。

親にとってもむずかしい時期に入ります。くつきき過ぎてため、突き放してもため。学校では殆どの子どもが進学のための勉強に追われ、「偏差値」やら「内申書」に脅され、塾に通い、家でも勉強・

勉強、休む暇ありません。そのコースから少し外れると人生の落伍者のような感覚にさいなまれます。

本当は、親はこの時期そつと肥やしを与え、間断的に水も与え、その子の将来生きる力を蓄えるように援助してやらねばならない時期なのではないでしょうか。

⑤いよいよ穂が出て穂が稔る時期に入ります。一つの穂に八十〜九十粒の籾が付き、一粒、一粒の籾が成長、登熟します。穂が出る時期は水を与えます。その後は間断的になるだけ遅くまで水を与えます。肥料は籾と相談して与えますが、これは見極めには高度なテクニクを要するので殆ど与えません。

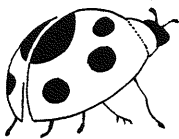
いよいよ成人前です。高校を卒業し進学あるいは就職、大人へのアドバイスを与えると共に子離れ、親離れの時期です。もう親から子へではなく、お互いに大人としてのつき合いが始まります。必要に応じてアドバイスをしてあげて下さい。

⑥収穫となります。丹精込めて作った稲を米として供する訳です。収量に一喜一憂し、品質に一喜一憂し農業の喜びの季節です。ところが労働の割に米は安く、特に最近価値下がりの方で憂鬱な気になる季節ともなりました。

子どもも成人し、大人の仲間入り子育てに成功したのか失敗したのか人であるだけにわからない時期です。でも子どもを信じることによって絶対失敗はありません。ところが最近の社会情勢、卒業はした就職できない若者が増えています。憂鬱なことです。

農薬はどう使うか

米作りと子育てを対比して話を進めてきました。でも農薬の話は入れませんでした。環境汚染、食物汚染等の問題が叫ばれる今、私たちの子孫にきれいな



地球を残すためにも、米を始めとする野菜をできるだけ農薬を使わずに育てることは大事なことでしょう。

実は私の手元にある「稲作こよみ」を見ると農薬の使用時期が記されています。「種子消毒」「苗立枯病消毒」「白かび病消毒」「ムレ苗防止消毒」以上が田植え前、田植え後に「イネミズゾウムシ防除」「除草剤散布一回〜二回」「葉いもち防除」「穂いもち・紋枯病防除」「第一回病害虫防除」「第二回病害虫防除」と実に十回を超える農薬を使うのが標準的な管理法です。もちろん状況を見てこれより少ない人、多い人があるわけです。

農業書でもないのにあえて消毒内容を列記したのは私たちが子育ての間に子どもに向かって何度も「農薬散布」をしているのではないかと思うからです。子どもに「あれしちゃういけない」「これしちゃういけない」「早く、早く」「ああしなさい」「こうしなさい」「勉強、勉強」とどなたも思い当たることがあることと思います。一つひとつのことは正しいのかわかりません。

農薬に「複合汚染」があるように子育てにも「複合汚染」があるのではと心配します。

ちなみに私の米作りは「種子消毒」と、「除草剤一回」の二回におさえています。あとは稲自身が持つ生命力を期待して栽培しています。少々収穫量がおちても、毎日食べる米です。安全な米を私自身が食べ若干の消費者の方に食べていただければ満足です。

子育ても子ども自身の持つ可能性を信じて「農薬」を控えた子育てがいいのではないのでしょうか。

米作りの基本は水のかげひきと施肥の時期

色々書いてきましたが、丈夫な稲作りの基本は水のかげひきと、施肥の量、時期だと思えます。以上の二項をこよみ通り間違わなければ丈夫な、たくましい稲が育ちます。ほとんど病気にかかりません。かかっても自力で治ります。それほど生命力を持った植物なのです。でも留意してやることはあります。

水を入れたり、干したりするのはなるべく早くや

ります。田圃に溜まった水は保温力があります。稲をぬるま湯に入れた様な状態です。なるだけ田圃の温度が低い朝、水を出し入れするのが最も稲に負担をかけません。また、肥料は少し少な目に与えます。肥料が過ぎると、葉が繁茂し、風通しが悪くなり、稲の大病「いもち病」などにかかりやすくなります。一度田圃に入れた肥料は出すことができません。様子を見て足りない様なら追肥すればいいわけです。あえて子育てと対比しませんが感じられる処があると思います。

おわりに

日本の穀物の自給率が四十パーセントをきつたと報道されています。もし何かの事情で輸入できなくなつたらと心配している多くの方がみえると思います。

子育てにとつても同じで大人が作り出した今の社会の状況に子どもが翻弄され、もつと大事にしなければならぬ事をどこかに忘れて来たのではないかと思えます。

「稲作こよみ」をながめながら、自信を持った、子どもを信じた子育てを考えようではありませんか。最後になりましたが、「稲作こよみ」を手に入れた方はお近くのJAに頼めばもらええると思います。手に入らなければ私にご一報下さい。お送りします。

(学校法人 黄柳野学園理事)

「ブーブ」に描いた

Nのこころの世界

吉川はる奈

子どもの絵は「子どものこころのメッセージである」といわれるが、いつも子どもの傍にいる大人もそのメッセージの中身になかなか気づくことができない。言葉という表現手段にあまりにも頼りすぎているからだろうか。

一歳十ヶ月を迎えたある日の夕方、Nはおやつを食べ終え椅子をおりた。いつものようにつぎつぎおもちやを取り出して遊ぶのかと思いきや私はNから目を離し夕食の支度にとりか

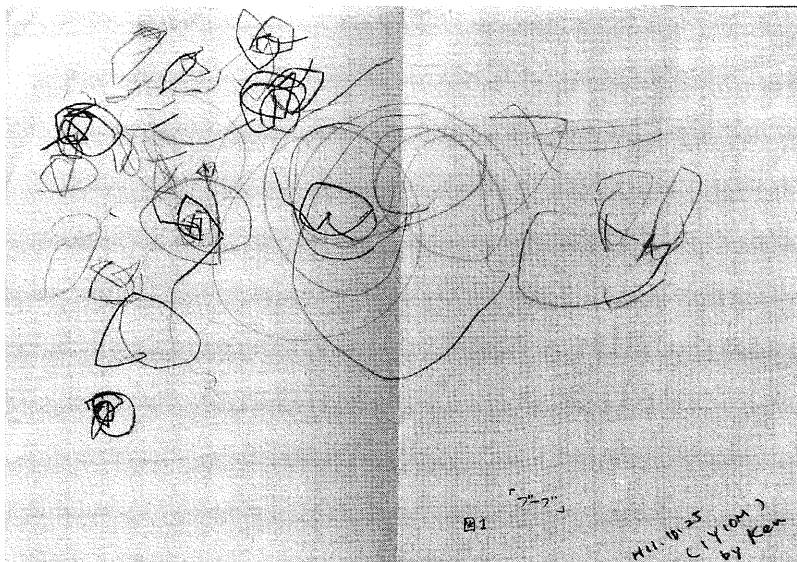


かった。

夕食の支度をしながらふと、「Nはどうしているのだろうか」と思った。いつもならおもちゃをとりだしながらあれやこれやと母親である私を呼ぶ。私にまとわりつきながら遊ぶので、合間をぬって夕食の支度をするのだが、また呼び戻されてしまいいっしょにNと遊ぶという繰り返し日が日常である。ところが、その日に限って私を呼ぶ声が聞こえない。しかも随分と静かだ。兄もいっしょに部屋にいるはずだが気になる。

気になって、部屋をのぞい

▼図1



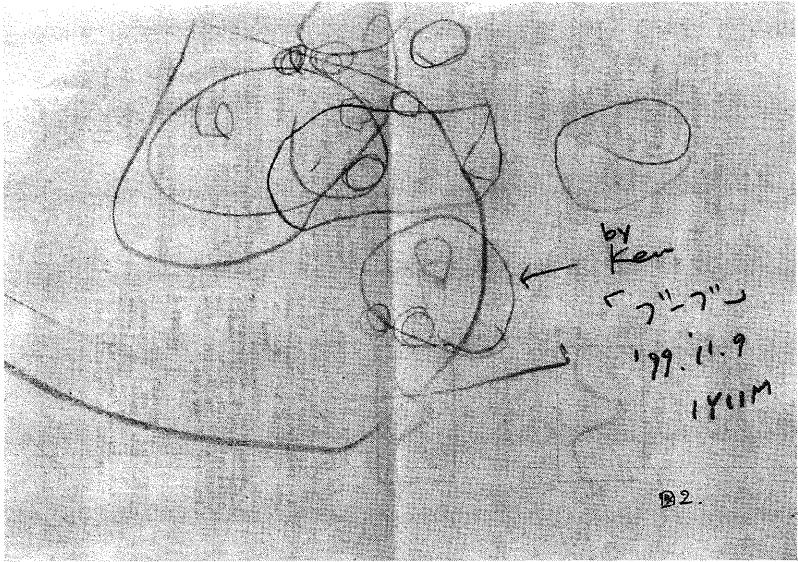
た。

Nは下を向いて一心に紙に色鉛筆を走らせていた。

かなり集中していたので私は驚いて、一瞬声をかけるのをためらった。少しNの様子をみていた。赤と青とピンクと黄色そして黒とさまざまな色でいびつな丸をたくさん重ねて描いている。「Nちゃん」と声をかけた。するとNは顔をあげてうれしそうに「ブーブ」と答えた。「本当だ、ブーブがいっぱい」と思わず私もそれに答えた。するとまたNは下を向き同じようにいびつな丸を次々と重ねる絵を描きつづけた。一時間ぐらい続けていただろうか。同じ姿勢で繰り返し「ブーブ」といいながら描きつづけた。そして次の日も次の日も家にいる時間はN自らテーブルの前に座り色鉛筆を使い「ブーブ」を描いた。(図1)

当時、Nは言葉として表現できるのは「ママ」「パパ」「ブーブ」くらいでいわゆる「言葉の早い子」ではなかった。大人からの言葉は理解しているようだったが自分でなかなか言葉を発せられずもどかしい様子もみられた。そんなNが「ブーブ」といいながら絵を描きつづけたのである。

二週間がすぎた。同じように「ブーブ」といいながら描きつづける絵をみると大きな丸の中に小さな丸が一つそして大きな丸の線に沿って小さな丸が二つ(図2)。ずいぶん変化していた。「ずいぶん車らしくなった」などと私は貧しい想像力を働かせたりした。N



▲図2

は同じように「ブーブ」とい
いながらさまざまな色で描き
つづけていった。

母親である私から見ると絵
を描きつづけるNのこの姿は
これまでの思うが侘に関心を
移しながら遊ぶNの姿と大き
く異なり、戸惑いを感じてい
た。「こんなに全神経を集中
させてどうしたんだろう」と
さえ思った。「ブーブ」とい
いながらひたす描きつづけ
るNのこのところの中をのぞいて
みたいなどという思いにもか
られていた。「そうブーブ
ね。Nちゃん乗ってるね」な
どと答えながらもどかしさ

を感じていた。そして「これだけいくつも『ブーブ』を描きつづけてNはやっぱり車が好きなんだ」などとぼんやり考えたりしていた。

Nの「ブーブ」描きは一ヶ月ほど続いていた。家で過ごす時間のうち食事や睡眠など必要最低限の生活事項を除いたNの全ての時間を費やして描いていた。

そしてNが一歳十一ヶ月になったある日、私のもどかしさは解けた。「ブーブ」といいながらいつものように大きな丸の中に一つ、線に沿って二つ小さな丸を描き、描き終えたその形をNは再度「ママ」と表現した。

「そう、ママのブーブなのね」と私は即座に答えていた。同じ「ブーブ」を描きつづけているように見えるが、Nの心の中では「ブーブ」がさまざまに意味付けられ表現されていたのではないか。考えてみれば「ママの（運転する）ブーブ」でNはいつも買い物に行ったり、保育園にも行く。同じように見えるNの描く「ブーブ」が、ママの運転する車であったり、パパの運転する車であつたり、よく見かけるバスであつたり、保育園に行く途中で通る消防署の消防車や救急車だつたのだろう。

私は言葉でがんじがらめになっている自分を恥じた。一枚の紙の上に、Nは「ブーブ」を通して自分のところをメッセージとして表現していたのだろう。言葉で表現されないが





ために私が読み取れなかったのだろう。

言葉として「ママ」と「ブーブ」「パパ」しかもたないNの最大限のメッセージが一つ一つの「ブーブ」の絵の中にこめられていたのだろうか。

「ブーブ」描きの終わりは本当に突然やってきた。二歳の誕生日の直前だった。あんなに夢中になって全神経を注いでいたはずの「ブーブ」描きを二歳四ヶ月になる現在もしていない。

そのかわり、本を見ては、テレビを見ては大通りを見ては、「ブルトーザー!」「キャンピングカー!」「消防車!」「バス!」「トラック!」と叫んでいる。どうやら言葉で表現することに夢中のようにある。

(お茶の水女子大学)

編 集 後 記

本田和子先生の連載「児童の世紀を振り返る」が再構成され単行本としてフレール館から出版されました。『子ども一〇〇年のエポック』です。子どもにかかわる人々が望みをもって次の世紀に足を踏み出すことができるように（本誌、十八頁）じっくりと読んでみたいと思います。

*

七月の下旬にわが家の玄関先のメダカの水槽に抜け殻を残してトンボが飛びたちました。

直径八十センチほどのこの水槽に、初めて「ヤゴ」をみつけたのは三年前でした。秋に水を全部取り替

えているときに、底の泥の中から大小のヤゴがもそもそと逃げ出しびっくりしました。それからは、底の泥までは流さないようにして、ヤゴもこの水槽の住人になりました。冬を越して、二本の棒を立てておくと、夏のある日そこに抜け殻が残っていました。それは本当にヤゴだったのだ、トンボがここに卵を産んでいったのだと、心の中に何か熱いものを感じました。

今年、初めて飛びたつ前のトンボをみました。次の日、子どもに話しかける母親の声が道から聞こえてきました。あ、昨日のトンボさんの赤ちゃん飛んでっちゃたね。ここにトンボさんの赤ちゃんがいるとは知らなかったね。私はそれを聞いてうれしくなりました。気づいたのは私一人ではありませんでした。（A）

幼 児 の 教 育

第九十九巻 第十号

（二〇〇〇年十月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十二年十月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレール館

〒113-8600 東京都文京区本駒込

六一一四一九

〒〇三三五三九五五六六一三（営業）

〒〇三三五三九五五六六〇四（編集）

振替 〇〇一九〇一―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレール館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

手づくり保育シリーズ

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈るシリーズ。不得手な先生でも子どもたちといっしょに楽しみながら作ったり遊べるのがチャームポイント。

最新刊

手づくり保育シリーズ⑬

わくわくどきどき 自然大好き遊び!



「自然と遊ぶ」「自然に遊ぶ」
今の子どもたちに求められているこの二つにポイントをおいて、自然の中で、豊かな感性を育てる遊び、わくわくどきどきする遊びを紹介。特別な準備を必要とせず、簡単に遊べて、楽しみながら自然への目や愛の心が育ちます。
救急ワンポイントレッスン付。

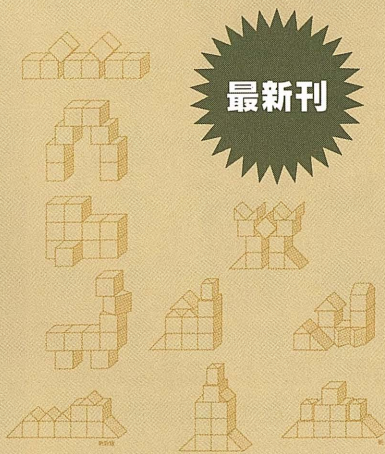
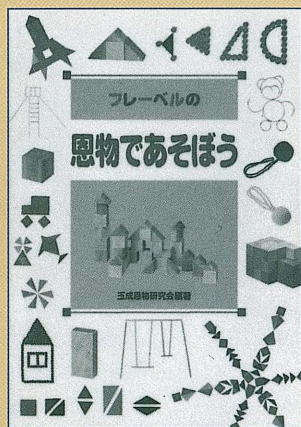


やまもと かつひこ/著

B5判・96頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレール館

フレーベルの 恩物であそぼう



フレーベルが創案した恩物とは、単純な素材を使い、楽しく遊べる総合的な教育遊具です。

その第1恩物から第10恩物までの特徴と使い方を、写真と図版を多用して楽しく紹介。

初めて恩物を扱う人にも、その具体的作品の数々が理解の手助けを容易にしてくれます。

玉成恩物研究会／編著

B5判・128頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館